ペルシャ語によるイラン立憲革命史文献
—覚え書—

加賀谷　寛

イラン史において，「イラン立憲革命」(ペルシャ語，Enqelāb-e Mashrūṭīyat-e Īrān. 1905-11) は，近代史の最も重要な事件であり，その挫折後に，レザー・シャー軍事独裁体制が登場する。イラン立憲革命は，広い意味の「ブルジョア革命」であるが，フランス革命よりは第一次ロシア革命の影響をうけ，それよりもさらに青年トルコ革命運動 (1908) に近い革命の性格を考えたらよいであろう。とくにそれは，帝国主義的体制が確立しはじめた時期における反帝民族運動という性格をもっている。このようにみるとき，イラン立憲革命は，同時代にレーニンによって指摘されたように，20世紀初頭の時期におけるアジアの目覚めのメルクマールの一つに数えられるものである。

立憲革命は近代改革としては不徹底に終ったといわれるが，それなりにイラン的近代の基礎をつくりだしたものとして，今日のイランの政治，社会，文化の在り方と関係してくる。

さて，これまでペルシャ語研究者（イスラム時代以降の近代ペルシャ語の）は，もっぱら古典時代のイラン・イスラム文化に学問的興味をいだくが，近代イランの社会，文化の発展を研究の範囲外においた場合が多かった。ただし後述の E.G.Browne は例外であった。上述のような問題意識から近代イランの社会，文化を具体的にとりあげるとき，きわめて豊富な興味ある研究課題がペルシャ語研究者の前にあるということができる。

ペルシャ語研修と，イランにおけるイスラムの展開を研究するため，筆者は1957年テヘラン大学文学部に留学したが，その間ペルシャ語による立憲革命史関係の文献にとくに注意を払い，第二次大戦後出版されたものばかりであるが，主要と思われる大部分の文献を入手することができた。拙稿ではそれらのリストを兼ねて，イラン人がイラン史の決定的な時期である立憲革命をどのようにうけとめ，どのような態度で書いているか，について気づいた点若干を取挙げたい。

なお，わが国において，イラン立憲革命史はイラン史の概説書で触れられているほか，注目すべき歴史的研究の唯一の試みとして，前田慶穂「回教圏民族運動史序説——ペル

シャにおける民族運動の形成過程」(『金沢大学法文学部論集法経篇』第三巻) が挙げられる。同氏はイラン石油国有化運動の昂揚によって衝撃をうけた時点にたって，イラン民族運動の源流を歴史的に探る試みとして問題を提起した。それは立憲革命史の研究それ自身を目的としたものでないが，それを立憲革命史としてみるとき，力点が立憲革命の準備期に主としておかれ，その主要部というべきムハッマッド・アリー・シャーの議会砲撃事件以後の革命の本格的展開がぬけ落ちてしまっている，と評さねばならない。

以下に，ペルシャ語によるイラン立憲革命史文献を刊行年（初版）の順に挙げる。

1. Nāzemo'l-Islām Kermānī, Ta'rī*kh*-e Bīdārī-ye Īrāniyān: yā Ta'rī*kh*-e Ma*sh*rūh wa Haqīqī-ye Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān (『イラン人の自覚の歴史——イラン立憲制の真実の歴史』) Tehrān A. H. 1323/A. D. 1910, 再版 SH. (ヘジラ太陽暦) 1332/1953.

   再版序文は，ケルマンの国民議会元代議士Seyyed Mḥd. Hā*sh*imi Kermānī により，本書の成り立ち，著者 (A. H. 1337 没) の略伝から成る。内容は，序文，第一，二，三巻の合本で，A. H. 1324年 Ramazān 月までの叙述で終る。残部は未出版。本書は，Seyyed Jāmālo'd-Dīn Asadābādī (アラブは al-Afg*h*ānī とよぶ) 関係の貴重な資料 (イランのウレマーに宛てた書簡，など) を収めている。また19世紀イランの宗教・社会運動のバーブ教運動と政治的改革運動とのつながりをみるための重要な資料を含んでいる。本書はイラン人による最初の立憲革命史として大きな意義をもっている。(E. G. Browne, Lit. Hist. of Persia, vol. iv を参照)

2. Aḥmed Kesravī, Ta'rī*kh*-e Hijdeh Sāle-ye Ā*dh*erbā'ejān (『アゼルバイジャン18年史』) Teh. 初版 1939—41, 第二版 1946.

3. A. Kesravī, Ta'rī*kh*-e Ma*sh*rūṭe-ye Īrān (『イラン立憲制史』) Teh. 初版?, 第三版 1951.

   著者は現代イランの重要な民主主義的，リベラルな思想家 (拙稿「現代イランにおけるイスラム近代主義の展開——A. カスラヴィーの文化革命思想を中心として——」，『東洋文化研究所紀要』第16冊，昭33)。この 2. はレザー・シャー末期に書かれた。この両書は，立憲革命のなかでだれが革命の敵で，誰が革命のため斗ったか，何故革命がその後後退したか，という真実を国民の前にあきらかにするために書かれた。ペルシャ語で書かれた立憲革命史のなかでもっとも批判的な叙述で，信頼できるものと評される。これら両書は現代イランでもっとも愛読されている。

4. Mehdī Malekzādeh, Zendagānī-ye Maleko'l-Motakallemīn (『マレコル・モタ

カッリミーン伝』) Teh. 1946.

マレコル・モタカッリミーンはアル・アフガーニーの影響を受け，立憲運動，社会改革運動の指導者で，ムハッマッド・アリー・シャーの反革命クーデターの際殺された。著者はその子で父の伝記のかたちで，事実上シャーの反革命期までの立憲運動史となっている。とくにテヘランの革命指導組織に詳しい。

5. Ḥājī Mīrzā Yaḥyā Dowlatābādī, Ta'rī*kh*-e Moʿāṣer : yā Ḥayāt-e Yaḥyā (『現代史——ヤフヤーの生涯』)，第二巻，Teh. A. H. 1328/A. D. 1949. 著者は，立憲革命の指導者の一人で，また教育学者。本書はその遺稿を出版したもの。第二巻は立憲運動開始期から，シャーによる Majlis 砲撃事件までを取挙げる。なお，第一巻は著者少年時代のイラン，第三巻は立憲革命のその後の発展，第四巻は，第一次大戦中の国民派 (Melliyūn) の政権から，レザー・シャー期にいたるまで。全巻で近代，現代イラン史を構成するもの。

6. Ibrāhīm Tīmūrī, Taḥrīm-e Tanbākū —— Awwalīn Moqāwamat-e Manfī dar Īrān. (『タバコ類ボイコット——イラン最初の非暴力的抵抗』) Teh. 1949. 立憲革命の前史といわれる 1891-2 のタバコ利権反対運動史。19世紀末のイギリスのイラン経済支配とそれに抵抗するイラン人民の斗争をはじめて取挙げた歴史研究。19世紀末，タバコ栽培，輸出がイラン経済で大きな位置を占めていたことがしられる。

7. M. Malekzādeh, Ta'rī*kh*-e Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān (『イラン立憲制の歴史』) 全七巻，Teh. 1949-1953. 各巻は立憲運動にたおれた7名の指導者に献じられている。イラン立憲革命の全史として，最も基本的な文献である。

8. E. G. Browne, Enqelāb-e Īrān (The Persian Revolution 1905-9, Cambridge 1910 のペルシャ語訳)，訳注者 Aḥmad Pa*jh*vah, Teh. SH. 1329/1950.

原著はヨーロッパ語によるイラン立憲革命史の最も重要な基本的文献としてしられる。著者は，シャーのクーデターのためヨーロッパに亡命したリベラルなイラン人運動家たちと接触し，彼らからえた資料に主として基いている。それに訳者注が附されていて参考となる。原著者は，その古典的なペルシャ文学史の著述によって一般にしられているが，立憲革命の際には，リベラルな立場から革命を熱烈に擁護し，帝政ロシヤの革命干渉を非難した。なおイギリス政府はイラン王朝に対するロシヤの影響が後退する限り，また革命運動が民主主義斗争に転化しない限り，立憲革命を支持する態度を示したが，それは半植民地イランにおける真の自由主義の発展のための支持ではなかったことはいうまでもない。原著はたんに狭く東洋学者にだけでなく，ひろくイギリス市民，とくに政治家にむけて，イランの政治の実情に注意をむけさせた点で大きな意義をもっている。著者は，近代イランの政治だけでなく，その基礎をつくっている社会，およびイラン国民の新思想，新文学の現実にかなりの程度まで密着することができたす

ぐれたオリエンタリストということができるであろう。何故ならばイラン人は著者の同情的態度を高く認め，「イランの友」に数えて今日なお追憶している（但し，Kesravī は著者に対して批判的）。本書が書かれて以後，西ヨーロッパでは新らしい本格的な立憲革命史はあらわれていない。むしろ本書はイラン人に近代史叙述の刺戟を与えたといってよい。本書は立憲革命の進行中の 1909 でおわっており，完結しているものでないことを附言しておく。

9. M. Pavlovich, V. Tria, S. Īrānskī, Enqelāb-e Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān wa Rī*sh*eh-hā-ye Ejtemā'ī wa Eqteṣādī-ye-ān（『イラン立憲革命とその社会的経済的基礎』），訳者 M. Hō*sh*yār, Teh. SH. 1330/1951.

原著はロシヤ語で，1926年ソヴエトで発行された。上記のブラウンの著書が全く手薄であった経済，社会的基礎に重点を置いている。史料的にみても，帝政ロシア時代の外交文書，カフカズからの革命参加者の記述を豊富に用いている点で特色をもっている。立憲革命の勢力の評価（とくにウレマーの勢力）について著者の間に見解の相違が指摘される。またレザー・ハーン独裁初期の新体制がダイナミックであった時期に書かれているため，レザー・ハーン評価をめぐる分裂を反映している。

10. Mḥd. Ḥoseyn Adīb Heravī Khorāsānī, Ta'rī*kh*-e Enqelāb-e Ṭūs：yā Peydāye*sh*-e Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān（『トウース革命史——イラン立憲制の発生』）Meshhed 1331/1953. モサデク（Moṣaddeq）の石油国有化運動の昂揚期の出版物で，石油国有化の支持を表明している。巻末に，著者の息子 Mḥd. Taqī Heravī による SH. 1330 年 Tīrmāh 月事件の全国的大衆運動の手記を附している。

11. I. Tīmūrī, 'Aṣr-e bī-*Kh*abarī：yā Ta'rī*kh*-e Emteyāzāt dar Īrān.（『知られざる時代——イラン利権史』）Teh. 1332/1953-4. 19 世紀後半からイランの富を外国人に売渡した利権譲渡を中心に，イランでも知られざるイラン近代史に光を当てたもの。一般に愛国者と考えられる Malkom *Kh*ān が売国的であったことも示され，立憲運動発生期の政治，経済問題をかなりはっきりさせてくれる。イランの新らしい歴史研究者のすぐれた成果ということができる。

12. Karīm Ṭāherzādeh Behzād, Qayām-e Ā*dh*erbā'ejān dar Enqelāb-e Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān（『イラン立憲革命におけるアゼルバイジャン蜂起』），Teh. 1334/1955. いうまでもなくアゼルバイジャンのタブリーズは立憲革命の中核で，市民が武装して市を防衛し，立憲制をイランにとりもどした。著者自身青年のとき，タブリーズ市民武装蜂起に参加した経験をもち，新らしい多くの史料を掘り起している。また立憲革命の左派指導者であった Seyyed Ḥasan Taqīzādeh，および当時学生で革命に参加した Dr. Rezāzādeh *Sh*afaq（足利教授のペルシャ語教師であった人）の序文が附されている。

13. Mardān-e *Kh*od Sā*kh*teh (『自分の努力で偉人となったものたち』), 監修者 *Kh*wājah Nūrī, Teh. 1335/1956. アメリカ版の偉人伝, S. K. Bolton, Lives of Poor Boys Who Became Famous. のペルシャ語訳に, アジアの代表的人間像を加えたもの。近代アジアの代表的人間としてガンディー, アタテユルクが取挙げられている。第一番目の人物に先帝レザー・シャーを取挙げ現国王が執筆している。立憲革命指導者として, アル・アフガーニー (Seyyed Ḥasan Taqīzādeh 筆), Sattār Khān (Dr. R. *Sh*afaq 筆), Jamālo'd-Dīn Wā'ez (S. M. Jamālzādeh 筆) が取挙げられている。

14. Nūro'llāh Dāne*sh*var 'Alevī の『立憲革命史』。Teh. 1335. エスファハーンの蜂起からはじまり, バクティヤーリー族の蜂起に中心。

15. E. G. Browne, Ta'rī*kh*-e Maṭbū'āt wa Adabiyāt-e Īrān dar dowreh-ye Ma*sh*rūṭīyat (The Press and Poetry of Modern Persia のペルシャ語訳), 訳注 M. M. 'Abbāsī. Teh. 1957. ブラウンのイラン文学史第五巻にあたるもの。立憲革命期の新聞, 文学を取挙げている。革命詩が大部分で, 原著にない詩がかなり附加されている。

16. Seyyed Ḥasan Taqīzādeh, The Background of the Constitutional Movement in Azerbaijan (Tr. from Persian entitled: Tahiyeh-ye Moqaddamāt-e Ma*sh*rūṭīyat dar Ā*dh*erbā'ejān.) Middle East Journal, 1960 Autumn 所収。
タブリーズ大学の要請で, 1954年タブリーズ国民図書館で行なわれた Baskerville (アメリカ人学校教師で, タブリーズ防衛中, 戦死した) の記念講演。立憲運動準備期から初期にかけてのイランの先進地域アゼルバイジャンの啓蒙思想家, リベラルな政治家の群像が取挙げられている。イスタンブール, およびカフカズの二方面からの革命思想の影響を明らかに示してくれる。

17. M. S. Ivanov, Enqelāb-e Ma*sh*rūṭīyat-e Īrān (Ocherk lstorii Irana 1952 のうち立憲革命史の部分のペルシャ語訳)。著者はソヴエトの指導的なイラン史学者で, ソヴエト東洋史の側の立憲革命史概説。共産党非合法下の出版で, 出版所, 刊行年が明記されていない。

以上挙げたものの他, ペルシャ語による立憲革命史と題する文献が数種あるときいているが, 現在入手困難であり, またそれほど重要で基本的な文献とは考えられない。

次にそれらの文献を通じて, イラン人による立憲革命の受けとめ方といった観点から, いくつかの問題点を挙げておきたい。

はじめに, 上記リストによってうかがうことができるように, 今日のイランにおいて

立憲革命史がかなりさかんに出版されていることである。もっともはやく立憲運動史をまとめたものは，立憲運動後期の 1. で，E. G. Browne の Persian Revolution にわずか先んじている。しかし立憲革命史と題する本がイランでさかんに出版されるようになった時代は，革命後 40—50年 を経た第二次大戦後であるということができる。もっとも 2. はレザー・シャー独裁体制末期からそれが突如として崩壊した第二次大戦中の「デモクラシー期」にかけて発表されたものであるが，一般に読まれるようになるのは，第二次大戦後のことであろう。立憲革命史叙述のこのようななが い間の中断はイランの政治のなかで立憲革命が正当な位置を与えられなかったことと対応しており，イラン現代史理解の上で重要な問題を提起している。立憲革命の挫折のなかから第一次大戦後の新らしい国際関係を利して登場したのが，レザー・シャーによる「20年のディクタートゥーリー期」とイランでよばれる時代で，立憲革命の目指した方向とはあきらかに異った政治を指向した。筆者の知っている範囲では，この時代に立憲革命史は出版されなかった（いまだ十分確認していないが）。レザー・シャー崩解後は言論の自由が久しぶりにえられたということからだけでなく，イラン人の政治意識のなかで自由主義，民主主義，民族主義の確立のための国民的伝統として立憲革命が回顧されるようになった，と考えることができる。イランが名目的に自由主義をかかげる時代になると，立憲革命史も現代イランの権力に好都合なように迎合的に書かれる面がでてくる。

それに対して，2. は，立憲革命の理想としてあった国民（Milli）のものとしての議会（Majlis）が現実には腐敗，堕落のシンボルでしかなくなったという現状批判から出発し，立憲革命のために真に斗った国民大衆と，その民主的発展を妨げて権力の座についたものとをはっきり区別させるために書かれた点で特色をもっている。このように同書は埋れ，歪められた立憲革命を書き直す試みで，何よりもイラン国民を反省させるためのものである。他の著書はイランの現状批判を極力避けている。

執筆の意図として注目されることは，大部分が立憲革命という古い世代の国民的体験をしらないイランの若い世代にあてて，「歴史の表面でなく真実を伝えるため」（Malekzādeh）書かれていることである。すくなくともイランにおけるデモクラシーの発展をねがう立場が容易にうかがえる。

新進の歴史研究者 I. ティームーリー著の 6. 11. を除いて，いずれも古い世代のリベラリストで立憲革命の斗士の書いたものである。タキーザーデ，シァファク，ベヘザードは革命当時青年で，立憲革命の左派の「デモクラット党」（Ḥezb-e Demokrāt）のラインに属した。タキーザーデは同党指導者として活動した。のちに彼らはレザー・シャー

体制に参加した。

著者の多くは，インテリの学者文化人で，革命の主体を成したイラン大衆の力を軽視する傾向がみられる。

大部分の著書は政治的事件，個人の伝記をならべただけのようなもので，イラン人による歴史記述の態度に共通する。しかしときに生のもの，直接的なものが未整理のまま伝えられていて興味深いというべきである。

また著述の動機に，自分に結びつく特定の個人，一族，グループの功績を示す意図が混入していることに注意を払わねばならない (**9.** 序文参照)。とくに **1.** の場合甚しいと批判される (**7.** 参照)。同じことはブラウンの場合についても指摘されるところで，ブラウンに接触したイラン人が自分の活動を誇張して個人的に歪めた資料を提供したため，事実と異なる個所がでてくるといわれる (**7.** あとがき参照)。

これと関連して，地方偏重，あるいは地方中心主義とよぶことが適当であるような革命史の地方的な限定を指摘することができる。

2. 3. 12. 16. はアゼルバイジャン，とくにタブリーズを中心にすえている。**1.** はケルマンの運動に重点がある。**10.** はホラーサーン，とくにメシェドを中心とし，**14.** はエスファハーン，とくにバクティヤーリー族の活動を中心に立憲革命の発展を辿っている。いずれも自分の関係のあったグループ，または地方に重点がおかれて，その他のグループ，または地方の歴史は手薄であると批評される。

最後に革命史構成における始点と結末をみると，始点は狭義には1905年末のウレマー商人の集団的抗議運動とされるが，一般に，立憲革命の前史，ないし準備期として，イラン・ナショナリズムの出発点でもある19世紀末の「タバコ・ボイコット運動」(1891-2) からはじめ，アフガーニー（拙稿「西アジアにおけるナショナリズム」，『思想』1960・12号），マルコム・ハーンを含めている。立憲革命の終結をどこに求めるかについては問題があるが，狭義には，1911年，Majlis 閉鎖で閉じることになるが，一般には第一次大戦まで，最終的にはレザー・ハーン体制確立まで連続するものとして取扱っている。